

「高瀬舟」について

前 島 和 子

目 次

はじめに

第一章 森鷗外と歴史小説

第二章 「翁草」と「高瀬舟」

第三章 役人庄兵衛の二つの問い

一、喜助の放った毫光について考える

二、安楽死について考える

第四章 二大テーマと鷗外の根底に流れるもの

おわりに

はじめに

「高瀬舟」の作者である森鷗外は、島根県津和野出身である。このことが、私に数多い作家の中でも特別尊敬と親愛の念を抱かせた。小、中、高と島根で生活してきた私は、強い地元びいき的な目で鷗外を見ていたような気がする。

鷗外の生家、墓などを観光地として見に行った小学生の頃から、

何か心ひかれるものがあった。

そして、私が最初に「高瀬舟」に出合ったのは、高校一年の時であった。短編小説、それも私にとっては馴染みのない歴史小説でこれほど感動したことはなかった。それは静かで、心の奥に雪が降り積もっていくような感覚だった。流人を乗せてゆく船の中に、人間の生と死という問題が含蓄されていることが興味深い。

鷗外が、「高瀬舟」で何を言わんとしているか。そしてまた、私にとってどういう存在であるのか、解き明かしていきたいと思う。

この小説は、「中央公論」昭和三十一年第一号に掲載された。鷗外が五十五歳の時である。この執筆にあたって用いられた史料は、神沢卓幹著、池辺義象校訂の「翁草」第十二の巻百十七「雑話」中の「流人の話」である。このことは、「高瀬舟」を脱稿した後発表された、「高瀬舟縁起」にある。

「創造力の不足」を自ら悟った作家が、自然を尊重したいという一つの動機をもって書いた歴史小説。まず鷗外の作品の中で、この小説がどんな位置を占めるのか。そして幾つかの問題を見つめていきたい。

私の中に、価値ある心の財産として残すために。

第一章 鷗外と歴史小説

まず、鷗外の活動は大きく三つに分けることができる。簡単にまとめてみると、

第一期：明治四十二年から「半日」「仮面」「キタ・セクスアリス」など「スバル」に発表。「雁」「青年」「妄想」など現代小説の大部分。

第二期：乃木大将の明治天皇への殉死に触発された「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」「大塩平八郎」「山椒大夫」「高瀬舟」など歴史小説を発表。

第三期：仮構ががゆるされる小説という形式にあきたらず、史伝・考証に這入って行った時期。「松江抽齋」「伊沢蘭軒」「北条霞亭」などがある。

第一期は、どれにも作者の影がさしていながら、それが軽く戯画化されていて、このことさらな平凡化が時には厭味になっているだけではなく、全体の作品の調子を低めて、作者の腰のきまらなさを感じさせる。鷗外自身もそこに描かれた主人公の消極性にたいすると同様に、こういう小説しか書けぬ自分に無意識の大きな不満を持っていたと思われる。だから、第一期は筆ならしの時期とみて、本来の鷗外作品は、歴史小説と史伝にあるとみた方がよい。

では、何故小説の舞台を過去に求めたのか、鷗外自身の文章を引用してみる。大正四年一月「心の花」の中の「歴史其儘と歴史離れ」である。

「……かう云ふ手段を、わたくしは近頃小説を書く時全く斥けてゐる

るのである。なぜさうしたかと云ふと、其動機は簡単である。わたくしは史料を調べて見て、其中に窺はれる『自然』を尊重する念を發した。そしてそれを猥に変更するのが厭になった。これが一つである。わたくしは又現存の人が自家の生活をありの俛に書くのを見て、現在が有りの俛に書いて好いなら、過去も書いて好い筈だと思った。これが二つである。わたくしのあの類の作品が、他の物と違う点は、巧拙は別として種々あらうが、其中核は右に陳べた点にあると、わたくしは思ふ。」

と言っている。この中の「あの類の作品」とは、「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」「堺事件」等を指す。

そして、その後こう続く。

「わたくしは歴史の『自然』を變更することを嫌って、知らず識らず歴史に縛られた。わたくしは此縛の下に喘ぎ苦しんだ。そしてこれを脱せようと思った。」

「わたくしは伝説其物をも、余り精しく探らずに、夢のやうな物語を夢のやうに思ひ浮べて見た。」

「わたくしは、おほよそ此筋を辿って勝手に想像して書いた。」これが「山椒大夫」「魚玄機」「最後の一句」「高瀬舟」等である。

「兎に角わたくしは、歴史離れがしたきに山椒大夫を書いたのだが、さて書き上げた所をみれば、なんだか歴史離れが足りないやうである。」

と反省している。というより、「歴史離れ」と「歴史其儘」のジレンマにとらわれた作家の嘆きであるようだ。

鷗外は、歴史小説を書くことでひとつの文明批評をしていたと思

われる。

過去の歴史から自己の理想に通う人間を選びだして制作の素材とし、日本人の特異な心理の秘密に迫るとともに、同時代の功利主義の枠を越えた日本人の精神の可能性を探ろうとしたのだ。

彼の歴史小説は、その制作のモチーフは少しも回顧的、趣味的な要素を持たず、作中人物がつねに死生の関頭に立っているように、作者の精神も生きる指針を真剣にさぐるうとしているので、このように生きた人間があったという事実を描くことが、彼にとつて同時代にたいする批判であると同時に、生きる希望につながるものだった。

「阿部一族」「じいさんばあさん」「高瀬舟」などが、読む者に人間の運命と死生について、あたかもギリシヤ悲劇に接するような感銘をあたえるのは、このためである。そして鷗外の作品・短編というものは、なんでもない形で随筆風に書いて行きながら、どこかに人生というものを彫り、深く刻み込んでしまっている。一度読むとなかなかそこから得た映像を消すことはできない。読み終った時始まると言ってもいいかもしれない。

第二章 「翁草」と「高瀬舟」

鷗外に「高瀬舟」を構想させ、生み出させた「流人の話」の原文を次に引用する。

「前略、或時一人の流人、公命を承ると否、世に嬉しげに、船へ乗ってもいさゝか愁へる色不見、守護の同心是を見て、卑賤の者な

がらよく覚悟せりと感心して、船中にて彼者に対して称嘆するに、彼云く、常に僅の営に、湯々粥を聚りて、露命をつなぎしに、此御吟味に逢候てより、久々在牢の内、結構なる御養ひを戴き、いたずらに遊び暮し冥加なき上に、刺此御鳥目二百文を下され（流人に鳥目二百銅づゝ賜事古来より定例なり）て、鳥へ遣はさる事如何なる果報にて如此なりや、是迄二百文の銭をかため持たる事生涯に覚江申さず、加程過分の元手有之候へば、たとへ鬼有る島なりとも、一つ身の凌ぎばいか様にも出来可申候、素より妻子親類とてもなく、苦しき世をわたり兼候へば、都に名残は更になく候とて、悦ぶ事限りなし、此者西陣高機の空引に備れありきし者なるが、其罪蹟は、兄弟の者、同く其日を過し兼ね、貧困に迫りて自害をしかかり、死兼居けるを、此者見付けて、逆も助かるまじき体なれば、苦痛をさせんよりはと、手伝ひて殺しぬる其科に仍り、鳥へ遣はさるゝなりけらし、其所行もとも悪心なく、下愚の者の弁へなき仕事なる事、吟味の上にて、明白なりしまゝ死罪一等を宥められし物なりとぞ、彼守護の同心の物語なり、」

校訂『翁草』第十二、卷百十七、雑話

この原文からわかるように、時は「或時」であり、登場人物は「一人の流人」と「守護の同心」である。

作品「高瀬舟」に鷗外が仮定した寛政年間も、弟殺しの罪人喜助も、護送の同心羽田庄兵衛も、これらはいずれも鷗外の命名である。喜助という名は流人の喜悅している様子からの連想であろう。

固有名詞をもって語られない「話」は、テーマがはっきりし、ストーリーがおもしろくなければ存在価値がない。「流人の話」は、

そのような視点からする分析に耐えるものを持つている。それを見抜いたのは、鷗外の作家としての眼力である。

まず、愁傷たる様子を見せないばかりか、喜々としている一人の流人の姿に目を留めた同心は、「卑賤の者ながらよく覚悟せりと感心」する。流罪にあたって「鳥目二百文」を与えられた事で、満足し、喜悅している流人の様子がいかにも愚かしく、しかも、忘却していた純粹なある精神として、鷗外の日常からは、遠い風景に映ったと思われる。

そこで流人の喜悅の由って来たる所を突き止めるべく、流人の犯した罪過の内容の陳述に入る。

また、原史料は「兄弟」とあるが、どっちが自殺を企てたか不明である。鷗外はそれを弟が自殺を計り、兄が結果として補助することに定めた。どちらでも良いはずなのに、何故このような構造にしたのか考える余地がある。

大正四年に書かれた「山椒大夫」の姉の関係を思い起こし比較してみる。

この作品は、安寿の叡智による精神の輝きが、厨子王の精神へ転生していくドラマだと読みとれることもできる。これに対し、「高瀬舟」は弟の死によって、兄はその精神を共生していく転生のドラマと読める。

「山椒大夫」では、転生が成就した故に、安寿の生は存在の意味を喪失し、死は当然の帰結となる。「高瀬舟」では、弟の死がまずあって、兄がその精神を継承していく事になるという相違がある。

喜助は、一旦弟の「肉体の死」とともに、「精神の死」を迎え、

かつての日常的現実を超えた「新たな精神」に在ったのだ。これを決定的に言うために「高瀬舟」では、次のように表現されている。

「わたくしは剃刀を抜く時、手早く抜かう、真直に抜かうと云ふだけの用心はいたしましたが、どうも抜いた時の手応は、今まで切れてゐなかつた所を切つたやうに思はれました。」

兄は、その内面に弟を切つた、その最後の命を断つた、という思いを残している。自ら弟の生の最後を断つことで、彼の今までの精神状態の最後が断たれたのではないか。分身としての弟を自分の手で殺す、しかも弟は自分を生き延びさせるために死のうとした。この思いが、今までの彼の内部世界を崩壊させ、それによって今までの在った現実の世界を逸脱し、弟とともにある超現実の生を生きることになつたのである。

通常の常識的世界にある庄兵衛にとつて、喜助があたかも菩薩の如く、「毫光」を放つ所以はここにあるはずである。

第三章 役人庄兵衛の二つの問い

この小説に内蔵されている問題は、高瀬舟の中で、役人である庄兵衛が、他の罪人とは全く違う喜助に問いかけたことで表面に浮かびあがってくる。庄兵衛が「おかしな奴だ」位に思い、無関心でいたならそうはいかない。要するに、小説「高瀬舟」は庄兵衛が喜助に質問した時初めて川面を滑り出したのである。また、そうせずにはいられなかつたのは何故か。二つの問いから導かれる事柄を考えたい。

一、喜助の放った毫光について考える

庄兵衛の第一の問い、おまえは鳥に往くのを苦にしていけないようだが、それは何故か、何を思っているのか。これに対して自分の極度の貧乏から二百文という金を手にしたことのない過去を語る。二百文を使わずに持っていることが出来て、島で為事をする本手にすることが出来るという。庄兵衛は、自分の身に引きくらべてみて、つくづくこの喜助の言い分に感心してしまふ。つまり「此時庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から毫光がさすやうに思った」のである。

この「毫光」という一語に注目してみる。「高瀬舟」よりも二年前に鷗外が発表した翻訳小説に「毫光」(「番紅花」大正三年四月、後に翻訳集『蛙』に再収)と題する短編がある。これは、メルヒオール・レンジェル作品である。そのあらすじを述べてみたい。

イスパハンに駱駝を牽いて歩く貧しい少年がいた。その少年は毎晩果樹園で会う少女、フィルツアアを想い、いづれ妻にしようと考えている。しかし、賢い回教信者で、財産家の初老の男がこのフィルツアアを見染めた。両親の命令で泣く泣く婚約を承諾した娘は、翌晩駱駝牽の少年に逢つてそのことを話す。そして傷心の少年と軽率な約束をかわす。信者と夫婦になる最初の夜は、きつと少年の家で明かすというのだ。ところが娘は、正直なばかりか痴で、次の日からはその少年と逢わなくなつた。つまり初夜権を与えることで、あきらめてもらい、それから毎晩求婚してきた初老の男の訪問をうけたのだ。

そして婚礼の夜、突然忘れかけていた過去の約束を思い出した娘は、何一つ残さず、婿に白状してしまふ。その正直さに感動した男

は、思いきつて少年のところへ娘を行かせることにする。ただし、あくまで朝必ず帰ってくるように言い含めて。

フィルツアアは、その少年の家へ向かう途中で、盗人に襲われる。彼女の宝石に目をつけ、彼女自身の美しさをも我物にしようとした。ところが、この無邪気な女は、盗賊に対しても素直に正直に今までのいきさつをすっかり語つてしまふ。そこで盗人は、善意を發揮して少年の家までフィルツアアを無事送り届ける。少年は、一部始終を聞いて非常に驚く。そこで直ちに女を連れて、これまた無事に夫の家へ連れていったというのである。

「毫光」という語はかくて物語られた不思議な話の結びに、次のように付け加えられた作者のことばの中に光っている。

「：話はここに終わる。そこでこれに付け加えて言うべき事は、只一つしかない。此女が無事に此夜を過したのは、武器を以て警護せられたのではなく、其他人力を以て庇保せられたのでもない。此女を救つたのは、廣大無辺な『痴さ』で、それが闇夜の道を迎る此女の小さい頭の周囲に、毫光の如くに赫いてゐたのである。女はどうかすると痴であるが、決して側からそれを気の毒がるに及ばない。」

一見「高瀬舟」と「毫光」では、背景も、人物も、状況設定もあまりにかけ離れているようだ。しかし、鷗外の創作行動は過去の記録のなかに生動する人間を想像するとき、往々にして全く違つた条件で成立した外国文学の作品からヒントを得る場合が多い。

「高瀬舟」の喜助は、「愁涙悲嘆してかきどく」のが常である罪人たちの遠島の前夜であるはずのものが、晴れ晴れとして空を仰い

でいるのである。

そして、二つめの問いかけで、罪状が明らかになる。病身の弟が兄に負担をかけて済まないと自殺を図り、それを医者を呼んで助けようとしたのに、もはや剃刀が咽喉にささって、「息をいたす度に創口のひゅうひゅうという音が」する重傷の弟から、何としてでも剃刀を引き抜いてくれと頼まれて止むなく殺してしまったという恐ろしい事件が、この罪の原因であるのに全く悪びれず、この晴れ晴れとした表情はどうしたことだろう。

これは喜助に、たった一人の弟を亡くしたかわいそうなことをしたという気持ちがあっても、疚しいことは何一つしていないからだ。自分は貧乏のどん底に生きてきたが、せいっぱい生きてきた。そして、これから島でやり直しが出来るというすがすがしい気持ちがあるからだろう。喜助には、無実ともいえる罪で遠島されることへの疑問さえもない「痴さ」がある。底辺に生きてきたものの底ぬけの楽天性としぶとさがある。正直がある。

この「痴さ」と「正直」さは、まさに「毫光」のフィルツァアに通じるものではないか。フィルツァアの底ぬけの正直と善意は初老の金持ちの婿に伝染し、盗人にまで伝染した。「毫光」の中の一節に「一体『善』は伝染性のものである」というのがある。訳出された「毫光」に五度繰り返される「痴さ」の語は白痴的というより、無邪気あるいは、純粹さ、邪念の無さとも言える。

「高瀬舟」は、流人喜助の様子、そのことばから、庄兵衛が自らを感化されていく物語とみることもできる。しかし、庄兵衛が「まだどこやらに腑に落ちぬものが残ってゐる」と考え込んでいる限

り、レンジェルの「毫光」のような人格同化の物語だとは言いきれない部分を残している。

二百文の鳥目を喜ぶ喜助の姿には、毫光がさすほど感動しても、弟殺しについては懐疑の域を脱していない。それとも疑うことによってお上の裁きを否定しているのか？

ここで、庄兵衛の二つの問いによって導かれた安楽死の問題を掘りさげてみよう。

二、安楽死について考える

○世界的歴史

安楽死とは、安死術ともいい、もはや助かる見込みのない病人がひどく苦しんで早く死にたいと望む場合、いつまでも苦しめないで安楽に死なせて苦痛から解放してやることである。

古代ギリシャでも自殺は罪悪とは考えられず、自殺を助けるのも罰せられたりはしなかった。古代ローマでは安楽死のようなことがさかんに行われた、とある。ところが、後期ローマ時代、キリスト教思想によって自殺を罪悪視してから、安楽死も一種の殺人として罰するようになった。

これに対して中世以後、ルネサンスによるギリシャ、ローマの思想の復活からヒューマニズムの立場に立って、自殺を個人の自由とみとめ、さらに安楽死をも認めようとする思想がおこってきた。トーマス・モアの「ユートピア」（一五一六）を引用してみる。

「不治の病に悩んでいる者があれば、その人の枕頭に侍しているいろいろな話をしてやるなど、あらゆる親切をつくしてその心をなぐさめてやる。しかもその病気が永久に不治であるばかりでなく日

夜を問わず猛烈な苦しみを伴うものであれば、司祭と役人とは相談の上、この病人に向つて、これ以上生きても人間としての義務が果たせるわけではなし、徒らに生恥をさらすことは、他人に対して多大の負担をかけるばかりでなく、自分自身にとつても苦痛に達しない。したがっていつそのこと思ひきつて、この苦しい病氣と縁をきつたらどうか、今は生きてるといふこと自体が一つの拷問ではないのか、もしそうなら、死ぬといふことに對して臆することなく、呑むしろ前途に明るい希望をもつてこの牢獄とも拷問ともいえる業苦の人生を、一思いに自らの命を断つて脱するか、それとも他人にその勞をとつてもらつて、死んでゆくか、その何れにしたらどうか、とすすめるのである。…以下略」

これを見ると、自ら命を断つか、他人にその勞をとつてもらふ安楽死をすすめている。

この思想をうけたのがフランス・ペーコンで、安楽死という言葉も彼がつくつた、とある。英語ではユータナジア、ドイツ語ではオイタナジイという(鷗外は「ユータナジイ」と言っている)。ペーコンは「健康の回復、苦悶の緩和は医務であり、健康を回復することが不可能なときは、安らかな美しい死に送ることも同様である。そして安楽死は医師の職業である」と主張した。

しかし、現代的な意味での安楽死が問題になり出したのは比較的新しく、十九世紀以後で、関心の高まったのは二十世紀になつてからである。

○日本の安楽死

日本では、昔は人命が尊重された、とはいいいくい面が少なく

い。切りすて御免は武士の特権であつたし、仇討ちがたたえられた。老人を山にすてた姥すて山風習、檜山節さえあつたほどで、不治の病人に「一服もる」のも大して罪のように考えられてはなかつたやうである。戦場で致命傷を負つて、苦痛に堪えかねている場合、これを安楽死させる「介錯」は義侠的な行為とされて、慣習となり、これが切腹に伴う一定の形式として制度化された。安楽死の類である。

明治になつてヨーロッパ式の刑法ができてからは、これらをも殺人罪とみなして禁じるやうになつたが、安楽死については余り強い関心がなかつた。明治四十年の改正刑法でも安楽死は認められていない。

その後、数多くの学者は、安楽死を否定している。

しかし、次第に肯定論者があらわれてきた。その中の一人が鷗外であり、論じたのは「高瀬舟」の中であつた。「高瀬舟縁起」で「…ここに麻酔薬をあたへて良いか悪いかといふ疑が生ずるのである。その薬は致死量でないにしても薬をあたへれば、多少死期を早くするかもしれない。それゆゑやらずにおいて苦しませてゐなくてはならない。しかし医学社会にはこれを非とする論がある。即ち死に瀕して苦しむものがあつたら、薬に死なせて、その苦を救つてやるがよいといふのである。これをユウタナジイという。薬に死なせるといふ意味である。高瀬舟の罪人は丁度これと同じ場合にゐたやうに思はれる」と説明している。

ユータナジイについては、鷗外自身切実な体験があつた。明治四十一年一月、鷗外の弟の篤次郎が突然の病氣で亡くなる。しかもこ

れは「高瀬舟」の喜助の弟が咽喉に剃刀を刺し苦しんだように、咽喉の病氣の手術が原因で亡くなる。臨終に間に合わなかったため、弟も同じ死ぬならせめて兄である自分と、明るい目を見交して死なせてやりたかった、という強い悔恨の情があったに違いない。そのことが、「高瀬舟」の「すると弟の目の色ががらりと変って、晴やかに、さも嬉しさうになりました」という喜助の口述になったのだと思われる。

そして、同じ年の二月、次男不律の死に続いて、長女茉莉も死に瀕した。鷗外は苦しむ我が子を見るにしのびず、主治医とはかってモルヒネを注射しようとした。ことは鷗外の妻の父の厳然たる反対に逢って果たされなかった。この時の鷗外は、安楽死を肯定する立場にいた。幸いにして茉莉は助かった。この時のことは「金毘羅」に書かれ、茉莉もまた「注射」（父の帽子）所収）に記している。

その他多くの医学者達も、安楽死を緊急避難行為として肯定している。しかし、何れも専門家の議論の段階であって、実際の問題にされ出したのは、主として戦後であった。もっとも日本の法律は安楽死を認めていない。

安楽死は、苦痛を和げるためではあるが、死によって苦痛から逃れさすもので、殺人であることは明らかである。しかし、その方法によっては、殺人とはいえないくなる。あくまで苦痛を和げることに主眼をおき、その行為は医師のみによって行い、悪用を避けるのだ。

「高瀬舟」の中で喜助が、弟を苦しみから救おうとしたのも一種の医療行為ではなかったのだからか。お上の裁きがどうであれ、最も重要なのは、弟は一刻も早く死なせてほしいと願ひ、喜助には、

案にしてやりたいという意志が強く働いていたことである。実際に切れなかったところまで切ったとしても、結果そうなっただけである。お互いのためにと信じてやった行為なのだから、善だ悪だと簡単に決められない。

しかし、殺人の罪に問われ流罪になった喜助も、それを運ぶ役人庄兵衛も、その行為がどんな意味をもったものか理解することが出来ず、真偽を明らかにするためのものさしを持たなかった。いくら考えても答の出そうにない問題は、お上の判断を聞いて従うのを良しとするべきなのだろうか。このことは、「最後の一句」の主人公いちが、父親の身代りに死のうとまで決意して、奉行所の白洲で言った言葉、「お上の事には間違ひはございませんまいから」を連想させる。

役人庄兵衛と、猷身のな娘いちは、お上の判断は必ずしも正しいとばかりは言えないということを暗に訴えている。むしろ権力に押さえられて、真実が歪められてしまうことへの憤りが感じられる。

第四章 二大テーマと鷗外の根底に流れるもの

「高瀬舟縁起」をまともにとれば、この小説は典型的なテーマ小説ということになり、しかもそのテーマは、財産の観念が人によって異なるということと、安楽死を是とするか非とするか、その判断は困難であることがそれぞれ独立した二つに分立っていて、その間何らかの統一がないという考え方が有力になっている。

しかし、喜助の足るを知った人柄に打たれ、「空を仰いでゐる喜助

の頭から毫光がさすやうに」さえ思い、最初「喜助」を呼びずてにしていたのがいつの間にか「喜助さん」と呼びかけ、弟殺しの顛末を聞いてさらにこれに同情するという結びつけ方も一つの見方だと思う。

そしてまた、「高瀬舟」を繰り返し読んでみると、短文の割に意外に徳川末期の庶民の生活が苦しいという指摘をした箇所が多いのに気が付いた。

喜助とその弟の二人がいれば最低のドン底生活にあえいでいたという事実を述べることによって、鵬外は、それを弟の安楽死を誘発する伏線として使用してはいるのではないか。大体、弟が病気で働けなくなったのも、堀立小屋同様の所に寝起きして、ろくな栄養もとれなかったであろうところに起因しているのかもしれないし、その弟にとほしい給料をさいて食物を買って帰る兄に対し、常に弟は濟まないという気持ちで一杯だったと鵬外は言っているのである。

自殺をはかった弟が苦しい息の中からいった言葉、「どうせなほりさうにもない病氣だから、早く死んで少しでも兄きに楽がさせたいと思ったのだ」の中にこそ、財産の問題と安楽死の問題を結びつける経済的理由があるのであり、したがって第一のテーマは、実は第二のテーマを導き出してくるための、唯一ではないにしろ、一つの有力な背景だったというふうに理解し、それによって二つを結びつけることは決して不可能ではない。

そして、安楽死の是非の判断について、同心の庄兵衛が迷いに迷ったあげく、結局お奉行様の判断に従うよりほかにはないと一度はきめつつ、しかしなお「腑に落ちぬものが残ってゐるので、なんだ

かお奉行様に聞いてみたくてならなかった」という結末に近い部分のもつ意味は、一体なんだろうか。何度も読み返してみると、腑に落ちぬものが残っているにせよ、お奉行様の判断に従おうとしたとは書いてないのであって、逆に庄兵衛は自分で判断がつきかねるから、役人である以上、上司の判断に従おうとは思ったが、「そうは思っても」、「まだどこやら腑に落ちぬものが残ってゐるので、なんだかお奉行様に聞いて見たくてならなかった」と書いてあるので、この順序は極めて重大な意味をもっている。

すなわち、この「高瀬舟」で、鵬外がいわんとしている真の狙いは、同心庄兵衛の迷いを一度は否定する役割を果たすお奉行様の判断を再否定しようとする事、換言すれば、「権威への反抗」であったのではないか。お上の判断に疑問を持たせたのは鵬外である。鵬外は、「ユウタナジイ」の是非論をここで展開するのを目的としなかつたのかもしれない。むしろ道徳倫理を越えた組織、あるいは社会における決定のあり方、即ち権威のあり方の問題を提起したのではなからうか。

これは、鵬外自身が陸軍軍医というサラリーマン社会において、時に止むを得ず権威の下に屈し、心ならずも妥協しなければならなかつた苦い経験への反省を意味するに違いない。更に、「高瀬舟」の原稿は、まだ陸軍省医務局長在職中であるとはいへ、すでに引退の意志を表明した直後に書かれているのであるから、鵬外としてもそれだけ物が言いやすくなったということもあるだろう。このような角度から見ると、役人が机の上で書類を読んでいただけでは、世の中のことはほんとは分からないことを述べた小説でもあり、鵬

外の痛烈な官僚批判を聞く思いがする。

「しょせん町奉行の白洲で、表向きのお供を聞いたり、役所の机の上で、口書きを読んだりする役人の夢にもうかがふことのできぬ境遇である。」

このくだりを現在の社会にあてはめても、不自然な感じがしないのがとても残念だ。

おわりに

「高瀬舟」の本当の主題が何であったか。それは、一つにしぼることはできないように思う。ただ、この小説は一篇の散文詩であって、歴史小説とはなり得ない、という考えはしたくない。

鷗外が、財産観念と安楽死の問題を別々にもってきてつなぎあわせたとしても、読む者が統一的テーマ、もしくは自分なりの問題点を引き出すことができればよいと思うからだ。

この小説を読む時、場面と人物と心理とが寸分の際のないように描かれていて、絵画的な美しさをも感じる。そしてその中にさまざまな人間の生き方を見る気がした。それは、決して作務的なわざとらしさを見せず、一隻の高瀬舟という船に乗って川を下っていった。

この「高瀬舟」について、私なりにいろいろな本を読み、研究したつもりだ。少なくとも初めてこの小説を読んだ高校時代よりも何かしら考え方が深まったような気がする。ただ、学生時代をしめくくる卒業論文としては、まだまだ不十分なものである。作者の歩んできた軌跡をたどってみることがほとんど出来ず、学者達の批評の言葉をかりるにとどまった。

しかし、一つだけ言えるのは、国文学が好きだと言いながら、これほど真剣にとりくんだことは、はじめてだった。その自分の姿勢を振り返って、とてもうれしく思うのだ。書き上げるまでの過程が大切だということを実感した。

森鷗外によって、まさに貴重な経験をさせてもらったといえるだろう。

参考文献

- 「増補 森鷗外論考」長谷川泉 明治書院
- 「比較文学」日本文学研究資料叢書 有精堂
- 「日本の近代小説」中村光夫 岩波新書
- 「六人の作家」井上靖 河出書房新社
- 「正宗白鳥集」正宗白鳥
- 「死—私のアンソロジー」松田道雄 筑摩書房
- 「権威への反抗」吉野俊彦 PH P 研究所
- 「国文学—鷗外その表現の神話学」七月号 学燈社
- 「山椒大夫・阿部一族」森鷗外 角川文庫

〔評〕

一、「高瀬舟」をくり返し読むという思い入れの深さが、この論文を説得力あるものにしたのだと思う。終始心ひかれながら読了することができた。「おわりに」見える感慨も必然性がある。

二、この論文は、あなたの内部に根づいた鷗外観が、自然に書かせたものといつてよいと思うし、作品研究のあるべき姿をそこに見ることが出来る。

(清水文雄)